

中高生の妊娠出産に関する社会福祉学的研究

－0日児遺棄事件を通して－

社会福祉法人かしの木ソーシャルワーカー

中・高スクールソーシャルワーカー 佐藤量子 (008750)

キーワード: 中・高生の妊娠、0日児遺棄、未然防止

1. 研究目的

0日児遺棄事件とは、生後24時間に満たない新生児を遺棄し発覚した事件のことで、多くは死亡している。それは昔から「間引き（嬰兒殺し）」として密かに、そして公然と我が国では行われていた。貧しい時代、家族が生き抜くための方法であった「それ」は、経済成長をとげ豊かになった現代においても、毎年相当数行われている。この現実を、われわれはどのように理解したらよいのであろうか。

社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会第1次から第9次報告（平成17年～25年）によると、0歳児の死亡事件が虐待死の4割前後を占めている。これらの虐待死亡事件のうち、半数が出生後24時間以内に亡くなった0日児である。加害者である実母は17～19歳までが多く、次に37、38歳が多く2極化している。

注目する点は、第7次報告にある10代の母親による0日遺棄事件の17事例である。17事例のうち過去にも妊娠出産の経験があった事例1件。家族と生活していたのは13事例（76.5%）、中高生が10事例（58.9%）だった。17事例からは、学校や家族関係者が生活を通して女子の異変に気づき、問いかけ、何らかの救いの手を差し伸べる機会があったと示唆される。

演者は、加害者とされる10代の女子（ここでは中高生の女子）を保護責任者遺棄の容疑で逮捕し、相応の罪で罰すればよいと考えることはできない。生物学上の父親は妊娠を知っていたのであろうか。そして、中高生の女子は親からの保護を受ける年齢で、学校教育の保健活動で守られるべき対象でもあるはずだ。

本研究では、加害者となった中高生女子の0日児遺棄事件に関する情報を新聞等から収集し実態の分析を試みる。そして、中高生による0日児遺棄事件の未然防止対策と女子への支援、及び再犯防止の在り方について今後を展望することを研究目的とする。

2. 研究の視点および方法

近年、「中高生のための望まない妊娠を繰り返さないために」というリーフレット（平成22年度厚生労働科学研究費補助金）も発行されているほど、10代の妊娠がハイリスクであることは広く社会問題化している。しかしながら、中高生による0日児遺棄事件を対象として未然防止策を検討した研究は存在しない。また、地方自治体の虐待事例の検証報告書も今のところ見あたらない。つまり中高生の0日児遺棄事件の実態も対応も、ほとんど手つかずの状況にあることが判明した。よって本稿では、平成10年以降の「中高生の0日児

遺棄事件」を新聞等で情報収集し、分析することで些少なりにも実態に迫り、今後を検討したい。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会「研究倫理指針」に従い、先行業績を引用・参照する際は厳格に引用元・参照元を記載するとともに、自説と他説の峻別を十分に留意する。

4. 研究結果

先述したように、中高生による0日児遺棄事件に関する検証報告書を出している自治体は見当たらない。新聞等で情報を収集したところ、平成10年以降の0日児遺棄事件は7件あった。言及するまでもなく、事件化したもの以外にも未発見・未解決の事件が存在する可能性は否定できず、実際はさらに多くの事件が発生しているものと推察される。

表のように平成10年以降、中高生の0日児遺棄事件が起きている。そして7事例中、6事例は女子一人で出産し遺棄している。3事例が自宅で出産し、3事例が公共等施設で出産しているが1事例の出産場所は不明である。なお2事例で児は保護、5事例は死亡である。

発生	年齢	所属	同居	状況
2010年	17歳	高校生	有	スーパーのトイレ便器内に産み落とし水の中に放置し死なせる。鞆に入れて持ち帰り、数日後に遺棄。
2010年	18歳	高校生	母、妹	自宅トイレで出産しゴミ集積場に遺棄。「動かなかったのどうしていいか分からず捨てた」と女子は述べている。
2011年	16歳	高校生	不明	女子が産み男子(16歳)が公園に遺棄。児は発見され無事。
2012年	17歳	高校生	不明	ショッピングモール内のトイレで出産し店内に遺棄。
2012年	17歳	高校生	不明	施設のトイレで出産。男児は窒息死。
2013年	17歳	アルバイト	不明	自宅の浴室で出産し、遺体を野球場敷地内に埋めた。
2013年	15歳	中学生	親	自宅で出産しゴミ置き場に放置。男児は発見され無事保護。家族は妊娠出産に気づかず。

(未成年による赤ちゃん遺棄まとめ: matome.nevoer.jp/odai/214001372863378200/より出典)

5. 考察

7事例中、6事例は中高に所属し同居している家族もいた。しかし誰も気付かず女子ひとりが病院以外の場所での出産している。女子らがどのような心理状態にあったかは不明だが、体の異変に強い不安を抱いたであろう。しかしながら、妊娠が友人や学校、家族に知られることを恐れ、警戒し隠ぺいした。そして、ネットに救いを求めたのではないかと演者は考えている。近年のネットの普及は学校区や地域を超えて情報が拡散し、女子が二次・三次被害を受ける恐れも多々ある。出産して学校に復帰できるシステムの整備(米国の例)や、家族や学校以外に相談できる場所の周知、性教育の在り方を含めた学校保健の検討も必須となるだろう。